

## 「歴史其儘と歴史離れ」

佐々木 雅 發

鷗外は第一歴史創作集『意地』（初山書店、大正二年六月）の自筆  
広告文で、次のように言っている。

《『意地』は最も新らしき意味に於ける歴史小説なり。従來の意  
味に於ける歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史実の新らし  
き取扱ひ方を創定したる最初の作なり。》

山崎一穎氏もいうように、（従來の意味に於ける歴史小説の行  
き方）という時、鷗外は塚原洪柿園を意識していたらうことは明  
らかである。<sup>(1)</sup>

鷗外は明治四十一年三月十七日付でバリの客舎の上田敏に書を  
寄せ、現下文壇の消息を伝えている。——〈当方所謂文壇の批評  
は、國木田、田山の他は作者はないかのやうな偏頗になつて、漱  
石といふ声すら今日は殆ど聞えません。例えば Anat. France の  
やうな作でも出たら一応大陳腐として斥けらるゝでせう。それも  
歴史の研究といへば洪柿園の外にない時代なら是非もありますま  
い〉。

では、洪柿園（蓼州）は〈歴史小説〉をどう考えていたのか。

彼は「歴史と小説（歴史小説にあらず時代小説なり）」（『新声』明治  
三十九年十月）という談話において、先ず〈歴史なるものが真の  
事実であるか〉と問い、〈私の考へでは此の歴史なるもの〉は〈一  
種の小説であらうとおもふ、だから〈どれが事実、これが事実  
といふよりは、寧ろ之れを一切作り物語と見てしま〉うべきでは  
ないか、といっている。

鷗外が〈従來の歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史実の  
新らしき取扱ひ方を創定した〉といったのも、〈どれが事実、こ  
れが事実といふよりは、寧ろ之れを一切作り物語〉だとする洪  
柿園の、いわば野放図な（と鷗外には見えたのだから）発言への、  
鷗外の厳しい批判が込められていたといえよう。<sup>(2)</sup>

(1) 『森鷗外・歴史小説研究』（桜楓社、昭和五十六年十月）参照。

(2) ただし後にも触れるように、この洪柿園の発言は卓論で  
あるといつてよい。

鷗外は有名な例の「歴史其儘と歴史離れ」（『心の花』大正四年一

月)で、次のようにいつている。

《わたくしの近頃書いた、歴史上の人物を取り扱った作品は、小説だとか、小説でないとか云つて、友人間にも議論がある。しかし所謂 *normative* な美学を奉じて、小説はかうなくてはならぬと云ふ学者の少くなつた時代には、此判断はなか／＼むずかしい。》  
《わたくしの前に言つた類の作品は、誰の小説とも違ふ。これは小説には、事実を自由に取捨して、纏まりを附けた迹がある習であるに、あの類の作品にはそれがないからである。》

先ず「わたくしの近頃書いた、歴史上の人物を取り扱つた作品」とは、時期的に見て、「大塩平八郎」(中央公論)大正三年一月、「堺事件」(「新小説」同二月)、「安井夫人」(「太陽」同四月)であろう。いずれも幸田成友『大塩平八郎』(東亜堂書房、明治四十三年一月)、佐々木甲象〔泉州堺土藩士〕『烈挙実紀』(明治二十六年十一月、以下『実紀』という)、若山甲蔵『安井息軒先生』(蔵六書房、大正二年十二月)を、ほとんど唯一の準拠とし、というよりそれに徹頭徹尾追従、密着して、いわゆる「歴史其儘」に書かれたのである。

さて鷗外は、「小説には、事実を自由に取捨して、纏まりを附けた迹がある習であるに、あの類の作品にはそれがない」といつた。そして「かう云ふ手段を、わたくしは近頃小説を書く時全く斥けてゐた」といつた。

《なぜさうしたかと云ふと、其動機は簡単である。わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念を發した。そしてそれを猥に變更するのが厭になつた。これが一つである。わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、

現在がありがたの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。これが二つである。<sup>(3)</sup>》

それにしても、「史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念」といつるとき、その「自然」とは一体なにを意味しているのか。

このことに関し、稲垣達郎氏はたとえば「堺事件」と「実紀」を対照し、「実紀」が事件の発生から終局までの経過を、時間の流れにしたがつて、逐次叙述しているのとおり、「堺事件」もまた日次にしたがつて筆を運び、描写技術上にありがちな、日次の転倒や変更などは、いささかもみられない」とし、「この、事象経過の描写が日次式ないし年代記風であることは、周知のように、鷗外の歴史ものにおける一大特徴でもある」といつている。

さらに氏は、「大塩平八郎」「安井夫人」に言及しながら、それらもまた「編年体、年代記風に組織されている」といつた(大塩平八郎)に至つては、天保八年二月十九日前後数日間が、まさに時刻表的に追われているのである)。のみならず「興津弥五右衛門の遺書」や「阿部一族」等、いずれも「鷗外の歴史小説は、年代記風の基礎に立っていることは、すでに周知の構成上の特色」といつた、次のように纏めている。

《鷗外のいくつかの歴史小説にあつては、その年代記風の平板な構成が、いちじるしい特色をなしているが、これはひとつには、歴史の自然への契機ないし条件としての史料が、時に年代記風になつており、鷗外が、けつしてそれに逆らおうとしないところに、そのような構成上の風が生れてくるのであろう。》

要するに〈史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念〉とは、単に〈史料〉にそのまま追従し、密着しようとする事ではない。そこに採られている〈編年体、年代記風〉な叙法、つまり〈時間の流れ〉とは時間の順序にこそ追従し、密着しようとする事なのである。

しかもそれこそは、人間の〈精神〉〈観念〉そのものにとる本然の習性なのだ。

だが、翻って鷗外は、〈わたくしは歴史の「自然」を変更することを嫌つて、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしは此縛の下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思つた〉と続ける。

この「歴史其儘と歴史離れ」が、もともと同月「中央公論」に発表された「山椒大夫」の自解であることは周知のことだが、鷗外は語を継いで、さらに次のようにいう。〈山椒大夫のやうな伝説は、書いていく途中で、想像が道草を食つて迷子にならぬ位の程度に筋が立つてゐると云ふだけで、わたくしの辿つて行く糸には人を縛る強さはない。わたくしは伝説其物をも、余り精しく探らずに、夢のやうな物語を夢のやうに思ひ浮かべて見た〉。

が、〈歴史上の人物を扱ふ癖の附いたわたくしは、まるで時代と云ふものを顧みずに書くことが出来ない〉と鷗外は続ける。それで〈時代を蔑にしたくない所から、わたくしは物語の年立をした〉。つまり鷗外はここでもなお、〈時代〉〈年立〉〈年齢〉とはあの〈時間の流れ〉、時間の順序にこだわらざるをえないのである。

鷗外は最後、〈兎に角わたくしは歴史離れがしたさに山椒大夫

を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れがし足りないやうである。これが私の正直な告白である〉と結ぶ。以上、鷗外の〈正直な告白〉を辿つてみたが、一体鷗外はここ、なにを語ろうとしているのか。

(3) 二つ目の理由は鷗外一流の厭味であるが、しかし鷗外は語るに落ちているともいえる。後年正宗白鳥は、〈日本の自然主義文学の「有りのまゝ、」主義を標準として批評すれば、鷗外晩年の作品は多くはその標準にかなつてゐるのではあるまいか〉といつている(『文壇人物評論 中央公論社、昭和七年七月。少なくとも白鳥には、かつて「小説を作るもの若事實を得て満足せば、いづれの処にか天来の妙想を着けむ。事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて做し得べきのみ」(『医学の説より出でたる小説論』—『読売新聞』明治二十二年一月三日)といつた鷗外が、いま打つて変わつて、もつぱら「事実」そのものに付き従うものに見えていたのではないか。そしてこれをさらにいえば、鷗外が宇宙の〈没理想〉(逍遙)、もつといえはその巨大な虚無を前に、ただ佇立拱手するものと見えていたのかもしれない(以上、拙論『文壇人物評論—批評の参照—』『鷗外と漱石—終らない言葉』三弥井書店、昭和六十一年十一月所収参照)。

(4) 『森鷗外の歴史小説』(岩波書店、昭和六十三年四月)参照。

ところで、これまで度々言つてきたように、人(5)はつねに今、今、

今の今現在の瞬間、その〈知覚〉と〈行動〉の中を生きている。いわば自分が今現在を生きているさなかの充溢と躍動。しかし人がそうした自分を振り返る時、人はまたつねに〈……した〉〈……だった〉と、〈過去形の言葉〉の中に生きなければならぬ。<sup>6)</sup>たとえそれが一瞬のことであっても、その一瞬の後、一瞬前のことを、人は〈過去形の経験〉として〈想起〉する。とすれば〈過去〉とは〈……した〉〈……だった〉という〈過去の想起〉〈過去の言語経験〉、つまりは〈過去物語〉なのだ。

しかも〈物語〉とは、〈過去〉の事象を〈時間の流れ〉、あの時間の順列に整序することに他ならない。つまり〈この原因ゆえに、そのあと、この結果が生じた〉という因果律、その必然の中に定位することではないか。そしてそれが、〈精神〉〈観念〉そのもののもつ本然の習性であることは繰り返すまでもない。

が、そうだとすれば人はつねにすでに、あの今現在を生きているさなかの充溢と躍動からは少しづつ遅れ、だからいま生きていることの生き生きとした実感が逸れて、とは今現にそこいながらそこにいない状態、鷗外の言葉でいえば、まさに〈醉生夢死〉〈妄想〉の中に生きているといわなければならない。

しかもそうだとすれば、鷗外には〈夢のやうな物語を夢のやうに思ひ浮かべ〉る自由は、所詮許されていないのではあるまいか。たしかに夢は醒めなければならぬ。いや醒めてこそ人は夢を見た<sup>7)</sup>と知る。とはつまりすべては後の祭り。だから人はなべて、有ったがように有った、それ以外に有りようがなかったと、その有った〈事実〉を、まさに臍を噛む思いで振り返るしかないのだ。

(5) 拙著『獨歩と漱石——汎神論の地平——』(翰林書房、平成十七年十二月)等参照。なおそこでも注記したが、小論も大森莊蔵『時間と存在』(青土社、平成六年三月)等、氏のいわゆる〈過去想起説〉に多くを負っている。

(6) 二葉亭四迷は「私は懷疑派だ」(『文章世界』明治四十一年二月)の中で、〈此間盜賊に白刃を持って追掛けられて怖かつたと云ふ時にや、其人は真実に怖くはないのだ。怖いのは真実に追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時<sup>8)</sup>にや既に怖さは余程失せてゐる〉と言っている。たしかに人は、〈過去〉を、いわば焦点の瞬間を、〈……した〉〈……だった〉とただ茫々と振り返るしかない。まさに夢物語、絵空事の中を辿るように。

鷗外はこの後、大正四年四月「津下四郎左衛門」(『中央公論』)、同九月「ぢいさんばあさん」(『新小説』)、大正五年一月「高瀬舟」(『中央公論』)等の作品を書く。が、この間、あの「歴史其儘と歴史離れ」のアポリアに、鷗外はどう対処していたのか。

無論それは、これらの作品を一つ一つ分析しなければならないのだが、しかしそれはさておき、鷗外は「都甲太兵衛」(大正六年一月一日〜七日「大阪毎日新聞」「東京日々新聞」)において、都甲太兵衛と宮本武蔵の会見の年時を推測しながら、〈歴史家はこれを見てわたくしの放肆を責めるだらう。小説家はこれを見てわたくしの拘執を笑ふだらう。西洋の諺に二つの床の間に寝ると云ふことがある。わたくしは折々自ら顧みて、此諺の我上に適切ななるを

感ずる」という。

つまり、この期に及んでも、依然鷗外は〈歴史家の拘執〉（歴史其儘）と〈小説家の放肆〉（歴史離れ）という二つの床の間で、輾転反側しているのだ。

——ただこの間、鷗外はひき続き、〈過去〉を、いわば焦点の瞬間を、〈……した〉（……だった）と茫々と振り返るしかない人間の姿を描き続けている。

すでに「山椒大夫」において、安寿らの母は〈余儀ない事をするやうな心持で舟に乗つた〉といい、〈自分の心がはつきりわかつてゐな〉かつたという。そして「高瀬舟」の喜助は〈どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議〉といい、〈全く夢中で〉したのだという。遇れば「大塩平八郎」の〈枯寂の空、さらに遇れば「舞姫」の太田豊太郎は気附いた時はすでに遅く、〈承り侍り〉と答えてしまつていたのだ。

(7) 柄谷行人「歴史と自然——鷗外の歴史小説——」(意味と意識) 河出書房新社、昭和五十年二月所収) 参照。

ところで鷗外は、大正五年一月十三日から五月十七日まで、「大阪毎日新聞」「東京日々新聞」に「洪江抽斎」を連載。ついで同六月二十五日から翌六年九月五日まで、同じく二紙に「伊澤蘭軒」を連載する。鷗外はその「伊澤蘭軒」の最後に、自らの拠つて立つ〈方法論〉を次のように述べている。

《わたくしは伊澤蘭軒の事蹟を叙して其子孫に及び、最後に今茲こんじ丁巳ていしに現存せる後裔を数へた。わたくしは前に蘭軒を叙し畢つた

時、これに論贊を附せなかつた如くに、今叙述全く終つた後も、復総評のために辞を費さぬであらう。是はわたくしの自ら擇んだ所の伝記の体例が、然ることを期せずして自ら然らしむるのである。

わたくしは筆を行ふに當つて事実を伝ふることを専にし、努て叙事の想像に涉ることを避けた。客観の上に立脚することを欲して、復主観を縦ま、にすることを欲せなかつた。その或は体例に背きたるが如き迹あるものは、事実に欠陥あるが故に想像を藉りて補填し、客観の及ばざる所あるが故に主観を備つて充足したに過ぎない。若し今事の伝ふべきを伝へ畢つて、言譚評に亘ることを敢てしたならば、是は想像の馳騁、主観の放肆を免れざる事となるであらう。わたくしは断乎としてこれを斥ける。》(その三百六十九)

一読、鷗外はすでに何かが吹つ切れたごとく、確乎として自らの〈伝記の体例〉を語る。まさしく一切の〈想像〉は避けられ、一切の〈主観〉は排せられて、有つたがように有つた〈事実を伝ふることを専に〉する——。もとよりあの〈時間の流れ〉、時間の順序に沿つて、〈編年体、年代記風〉、さらに鷗外の言葉でいえば「荒涼なるジエネアロジツクな方向」(「なかじきり」)、要するに〈自ら擇んだ所の伝記の体例〉に落着いたわけなのである。

が、問題がないとはいえない。〈事実には欠陥あるが故に〉？

あるいは〈客観の及ばざる所あるが故に〉？  
繰り返すまでもなく、〈過去〉とは〈想起〉においてはじめて経験される。従つて(カントの〈物自体〉に就つていえば)、〈想起〉

以前に〈過去自体〉はない。<sup>(8)</sup>しかも〈過去自体〉がないとすれば、どうして〈事実〉に欠陥あるが故に」といい、〈客観〉の及ばざる所あるが故に」といえるのか。

しかも〈過去自体〉がないとすれば、〈想起〉にはなんの根拠もない(正誤を比べる根拠がないのだ)。ただ恣意に任せ、種々〈想起〉されるだけである。<sup>(9)</sup>

だが、鵬外がいま当面しているものは、〈過去自体〉ではない。一旦は〈想起〉されたもの、つまり、〈史料〉〈史実〉であつて、だからすでに〈想起〉されたものを〈批評〉する余地は十分残されていることだろう。<sup>(10)</sup>

(8) ニーチェは『権力の意志』で、〈現象に立ちどまつて、「あるのはただ事実のみ」と主張する実証主義に反対して、私は言うであろう。否、まさしく事実なるものはなく、あるのはただ解釈のみと。私達はいかなる事実「自体」をも確かめることはできない」という。なお注(11)の拙論参照。

(9) 渋柿園が〈歴史なるもの〉は「一種の小説」、〈一切作り物語〉というのは、この種々〈想起〉されるものの謂といえよう。

(10) ただし〈事実〉ということに関し、鵬外の言葉使いには曖昧なところがある。それを言えば、〈事実〉とは一度〈想起〉された〈史料〉〈史実〉上の〈事実〉であり、先行的にある(しかしそんなものはない)〈事実自体〉ではないことを確認しておかなければならない。

さらに鵬外は次のようにいう。

《蘭軒は何者であつたか。榛軒柏軒将何者であつたか。是は各人がわたくしの伝ふる所の事実の上に、随意に建設するところを得べき空中の樓閣である。善悪智愚醇醜功過、あらゆる美刺褒貶は人々の見る所に従つて自由に下すことを得る判断である。》

わたくしは果して能く此の如き余地遊隙を保留して筆を行ふことを得たか。若し然りと云はゞ、わたくしは成功したのである。若し然らずして、わたくしが識らず知らずの間に、人に強ふるに自家の私見を以てし、束縛し、阻礙し、誘引し、懐柔したならば、わたくしは失敗したのである。》

要するに人が〈史料〉〈史実〉を〈批評〉するのは〈随意〉〈自由〉である。むしろ〈自家の私見〉において、その〈批評〉を封殺することは、確かめようのない〈事実自体〉を断言することに他ならない。おそらく〈史料〉〈史実〉はつねに〈批評〉に晒され、終わりなく揺れ動く。修訂され、変容してゆくのではないか。<sup>(11)</sup>

そして鵬外は続ける。

《史筆の選擇取舍せざることは勿論である。選擇取舍は批評に須つことがある。しかし此不可避の批評は事実の批評である。価値の判断では無い。二者を限画することは、果して操觚者の能く為す所であらうか。將為すること能はざる所であらうか。わたくしはその為し得べきものなることを信ずる。》

然り、ここにいう〈批評〉とは単に〈価値の判断〉に留まらない。つまり〈あらゆる美刺褒貶〉をこえて、あくまで〈事実の批評〉が〈不可避〉であるという。では、そのいわゆる〈事実の批評〉が

評」とはなにか？

もとより《あらゆる美刺褒貶》は《随意》《自由》である。しかしそれが《空中の楼阁》のまま終わつてはならないのだ。

たしかに《史料》《史実》はつねに《批評》を受けつつ修訂され変容する。が、その間にも《批評》は、つねに《事実》への遡及を無限遠に目指していなければならない。

無論、《過去自体》には決して届きはしないだろう。しかし、だとしても、真実ある事実が過去に実在したであろうこと（過去の實在性）、あるいは《事実の實在性》を、他でもない、今まさに《想起》することをもって追尋することは、《操觚者の能く為す所であらうか》、然り《為し得べきものなることを信ずる》と鷗外はいうのではないか。<sup>13</sup>

(11) 拙論『阿部一族』論（『鷗外と漱石—終らない言葉—』前出所収 参照）

(12) だが、にもかかわらず自然科学（者）は本来的に、経験に先立つ《事実自体》を無限遠に想定し追究してやまないだろう。

(13) 漱石は「田山花袋君に答ふ」（『国民新聞』明治四十一年十一月七日）で、《活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色》を書くことを主張している。書いた《人間が活きてゐるとしか思へなくつて》、書いた《脚色が自然としか思へぬならば》、その《作者は一種のクリエーターである》（ただし漱石は花袋への対抗上、《書く》とはいわず《拵へる》といっている）。いま《過去の實在性》（あるいは《事実

の實在性）といったのは、この《活きてゐるとしか思へなく》、《自然としか思へぬ》ということであるといえよう。しかしそう《としか思へぬ》としても、一体誰がそれを保証しうるのかという問題が残る。

さて、鷗外は、さらに次のようにいう。

《わたくしは渋江抽斎、伊澤蘭軒の二人を伝して、極力客観上に立脚せむことを欲した。是がわたくしの敢て試みた叙法の一面である。》

わたくしの叙法には猶一の稍人に殊なるものがあるとおもふ。是は何の誇尚すべき事でもない。否、全く無用の労であつたかも知れない。しかもわたくしは抽斎を伝ふるに当つて始めて此に著力し、蘭軒を伝ふるに至つてわたくしの筆は此方面に向つて前に倍する發展を遂げた。

一人の事蹟を叙して其死に至つて足れりとせず、其人の裔孫のいかになりゆくかを追蹤して現今に及ぶことが即ち是である。

前人の伝記若くは墓誌は子を説き孫を説くを例としてゐる。しかしそれは名字存没等を附記するに過ぎない。わたくしはこれに反して前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐるのを見、其糸を断つことをなさずして、組織の全体を保存せむと欲し、叙事を継続して同世の状態に及ぶのである。》（その三百七十）

鷗外は再度自らの立伝の《叙法》が《極力客観上に立脚》してゐること、つまり有つたであろうことを、ただ有つたがままに記

述するものであることを確認する。

が、鷗外は更に、もう一つの特筆すべき（叙法）に触れる。（一人の事蹟を叙して其死に至つて足れりとせず、其人の裔孫のいかになりゆくかを追蹤して現今に及ぶことが即ち是である）と。

ただ、ここでも注意しなければならないことがある。鷗外は「前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐる」というが、無論これは、「前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟」が胚胎ないし予兆されているということではない。そう見るとしても、実はあくまで後代によつてその都度、前代が「想起」されているということであり、また鷗外が現在只今から、そう「想起」しているということに他ならない。

鷗外はこうして「前代の父祖の事蹟」を追い、また「其糸を断つことをなさずして」、「其子孫の事蹟」に至る。そうして、「組織の全体を保存せむと欲し、叙事を継続して同世の状態に及ぶ」というのである。鷗外の「史伝」の世界が、かくして現出するのだ。

ただ、いささかくどいが、「想起」とは繰り返すまでもなく恣意であり、「……した」「……だった」という「過去形の言葉」によつて、その都度制作される「過去物語」にすぎない。たしかにそれはその都度整合的に生成され構成されたとしても、要するに夢物語、絵空事に紛う、ごくぼんやりとして取り留めもないものであることは、私達一人一人の「想い出」に徴してみても明らかではないか。

——人は「想起」以前に有るといふ「過去」をとらえることが出来ない。いま想ひ浮かべるぼんやりとして取り留めもないこと

こそが、いわゆる「過去」というものであり、「過去の实在性」（「事実の实在性」）に他ならない。しかも、いかに実証的に（？）「史料」を「史実」を隈無く調べてみても、それはすでに誰かによつて記憶され記録されたもの、つまり「想起」されたものであることに変わりはないのである。

が、鷗外は孜孜兀々として一人の事蹟を叙して其死に至つて足れりとせず、其人の裔孫のいかになりゆくかを追蹤する。おそらくそこには、よしそれがいかに曖昧模糊としたものであるとしても、「父祖の事蹟」が「子孫の事蹟」に繋がり、「同世の状態に及ぶ」——、つまりそこに、父祖から子孫へと継続し、持続し、そしてなによりも現在に接続して今眼前の象となつて息づく命の絆、それをしも夢物語、絵空事であるということとは出来ないといふ、鷗外の強い思いがあつたからではないか。

人が父母から生まれ、兄弟姉妹として育ち、婚姻し、子をなし、死ぬ、その無限の繰り返し。しかもその間、日毎顔を見合わせ、声を聞き合い、肌触れ合つて生きてきた「事実」（まさに「知覚」と「行動」の経験）、そしてその結果として、いま眼前に連続して存在する命の「事実」に見えることを、すべて「幻想」として葬りさることが出来るか？

さらにその都度、繰り返し追懐され、愛惜され、つまり「想起」を重ねられて、人々の共有の伝承（家伝、家乗、口碑、家譜）となり、二重に保証されて（その都度の「想起」と「伝承」といふ「想起」と、それが「現今に及」んでいるのである。

しかも鷗外は「語り部」（伝承者）となつて、他の「家伝、家乗、

口碑、家譜」を組み入れ、整理しながら、そうして社会全体、歴史全体の真実在に迫らんとする——。いやそこまでは言わないとしても、少くとも一家一族の生まれ、子をなし、死ぬという「事実」とその無限の循環。人はそれを信ずることなくして、今日現在の我そのものを信ずることは出来ないといえよう<sup>15)</sup>。

だが、そうだとしても、人の運命のなんと苛酷にも果敢無いものであろうか。人が生き死んだということを、どれだけの人が記憶しているか。たとえ記録したとしても、どれだけの時にわたらうか。やがてすべては掻き消えて、もはや跡形もなく消え失せるのだ。

鷗外は、(わたくしの伝記が客観に立脚したと、家族を沿討したとの二方向は、必ずしも其成功不成功を問はず、又必ずしも其有用無用は問はない)(その三百七十)と続ける。まさしく鷗外は、記憶と記録(つまり(想起))においてしか(過去)は蘇りえないし、留めおくことも出来ないことを知りつつ、しかもその結果が(成功不成功)であるか、さらに(有用無用)であるかを問わないという。いや問うことは出来ないといっているのではないか。

(14) 鷗外はこれと同じことを、すでに「渋江抽斎」(その六十  
五)で言っているが、いまは略す。

(15) (歴史を貫く筋金は、僕等の愛惜の念)といったのは小林秀雄だが、どんなに(実証的な事実)を積み上げても、それだけで(歴史事実としての意味)は生じない。いわば死児の齢を数える母親の哀しみや恨みこそが、(歴史事実を現実化し、具体化し、客観化すると言わねばならぬ)(歴史

史と文学』『歴史と文学』創元社、昭和十六年九月)。が、だとしてもその子は、もはや生き返りはしない。

鷗外は、「伊澤蘭軒」その三百六十八、次のようにその立伝の叙述を展開し、収束する(紙幅の関係上、その一部を略す)。

《わたくしは蘭軒歿後の事を叙して養孫棠軒の歿した明治乙亥の年に至つた。所謂伊澤分家は今の主人徳さんの世となつたのである。以下今に遡るまでの家族の婚嫁生歿を列記して以て此稿を畢らうとおもふ。

明治九年三月七日、徳の幼弟季男が生れて二歳にして夭した。

(略)

十三年四月四日徳の姉良が所謂又分家の馨に嫁した。馨三十四年九月三十日馨の長子信一が生れた。

十七年十二月二十日馨の長女曾能が生れた。(略)

二十二年徳の長女たかよが生れた。馨の第二女かつが十月に生れて十二月十三日に夭した。(略)

二十八年徳の長子精が三月二十日に生れ、二十六日に夭した。

三十年徳の第二女ちよが九月三十日に(略)、馨の三女ふみが

一月二十九日に、第二子信治が十月三十日に生れた。

三十三年二月四日馨の第三子玄隆が生れて夭した。尋いで五月十一日に長子信一が二十歳にして世を早うした。(略)

三十五年二月二十二日徳の第二子信匡が生れた。馨の母春が十二月二十四日に七十八歳にして歿した。

三十八年十一月二十四日磐が五十七歳にして歿した。

四十年二月二十五日徳の第三子信道が生まれた。

四十一年八月三十日徳の妻かねが四十一歳にして牛込区富久町の家に歿した。

四十三年八月二十三日徳の第三子信道が四歳にして夭した。

大正四年七月十三日信治の叔母、狩谷矩之の未亡人國が七十二歳にして歿した。是より先三十三年一月五日に矩之は歿したのである。

五年信治の叔母安が六十五歳にして歿した。(略)

此間明治十年に池田氏池田氏で京水の三男生田玄俊、小字恒三郎が撰津国伊丹に歿し、十三年に小嶋氏で春澳しゅんおく瞻淇せんきが歿し、十四年に池田氏で初代全安が歿し、十八年に森氏で枳園しきえんが歿し、又石川氏で貞白が歿し、三十一年に小島氏で春沂しゅんぎ未亡人が歿し、三十三年に狩谷氏で既記の如く矩之が歿した。(以下略)

さながら点鬼簿、いやあるいは数行、一行の文字の刻まれた墓誌や墓石の立ち並ぶ森閑とした墓域の一画に、足を踏み入れた時のような〈荒涼〉の気が漂う。鷗外は〈前人の伝記若くは墓誌は子を説き孫を説くを例としてゐる。しかしそれは名字存没等を附記するに過ぎない。わたくしはこれに反して〉云々といつていたが、ここに来て鷗外は、まさに〈名字存没等を附記するに過ぎない〉。

無論、伝の中心に位置する人々の記述は、断簡零墨に至るまでの龐大な資料に支えられて浩瀚である。しかしそれさえ、彼等が生きた全重量、その上にあつたらう万感の思いに比べれば、記さ

れたものは寥々たるものにすぎない。

が、要は記述の多寡の問題ではない。すべては過ぎ去つてゆく時間の中で、やがては人の記憶、記録からも消えて、最後は墓誌、墓石に刻まれた数行、一行の〈名字存没〉の文字に残るばかりではないか。(そういえば鷗外は、〈墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス〉と言ひ遣していた。)

しかもそれさえも、やがて雨に打たれ、苔むし、風化して土に還るのだ。

要するに追懐と愛惜による記憶、記録という人間の最後の存在の証も、ついに数行、一行の〈名字存没〉の文字に収斂し、やがては消え去つてゆく。とすれば「伊澤蘭軒」その三百六十八の文字は、そうした人間存在が一切滅び去ることの予示を意味しているのかもしれない。

鷗外は「なかじきり」「斯論」大正六年九月、折しも「蘭軒」連載の了らんとする時、

《歴史に於ては、初め手を下すことを予期せぬ境かまであつたのに、経歴と遭遇とが人の為に伝記を作らしむるに至つた。そして其体裁をして荒涼なるジエネアロジツクの方向を取らしめたのは、或は彼ゾラにルゴン、マカアルの血統を追尋させた自然科学の余勢でもあらうか。》

《わたくしは叙実の文を作る。新聞紙の為に古人の伝記を草するものも人の請ふがま、に碑文を作るのも、此こゝに属する。何故に現在の思量が伝記をしてジエネアロジツクの方向を取らしめてゐるか

は、未だ全く自ら明にせざる所で、上に云つた自然科学の影響の如きは、少くも動機の全部では無さそうである。<sup>16)</sup>」

と述べ、さらに「觀潮樓閑話」(帝國文学)大正六年十月、「蘭軒」連載のまさにとつた時、「わたくしは目下何事をも為てゐない。只新聞紙に人の伝記を書いてゐるだけである。何故に伝記を書くかと云ふに、別に廉立つた理由はない。わたくしは度々云つた如く、此等の伝記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくつて書いてゐる」といつてゐる。

たしかに、一切は消え失せ、滅ぶのだ。とすれば、記憶し記録することに、一体なんの意味があるのか？ まさに(無用)であるとしかいいえない。しかも人は、まさしくシジフォスのように、さらに一步を踏み出さなければならぬ。(只書きたくつて書くものが現にある以上——)。

もとよりそれも(無用)でしかない。しかし、すでにそれを(無用)ということも(無用)ではないか。

鷗外はこれに先立ち(大正五年七月六日〜七日「東京日々新聞」「大阪毎日新聞」)に、「空車」という一文を書いている。

——「わたくし」は(往々街上に)、(空車)を見る。無論この車、いつも(空虚)であるわけではない。荷物を(梱載)している時もある。(しかもさういふ時には此車はわたくしの目にとまらない)。

《わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であ

るが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これを繋いである馬は骨格が遅しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたように、緩やかに行く。馬の口を取つてゐる男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きな車の霊でもあるやうに、大股に行く。此男は左顧右眈することをもなさない。物に遇つて一步を緩くすることをもなさず、一步を急にすることをもなさない。旁若無人と云ふ語は此男のために作られたかと疑はれる。》

そして鷗外は、「わたくしは此空車の行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない」と繰り返す。「わたくしは此空車は何物かを載せて行けば好いなどとは、かけても思はない。わたくしが此空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようと思はぬことも、亦言を須たない。縦ひその或物がいかに貴き物であるにもせよ。》

鷗外の言わんとすることはすでに明らかであろう。鷗外はもはや、なべてのことに対し(有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない)。ただその車が傍を過ぎ、そして鷗外は(目迎へてこれを送る)ばかりである。

(16) いわば鷗外の(生得の実証精神)「三好行雄」解説『近代文学注釈大系 森鷗外』有精堂、昭和四十一年一月)が、あの確かめようのない経験以前の(事実自体)を、無限遠に追いかけてゐるのかもしれない。しかし同時に、鷗外のいわば永遠の文学精神が、その不可能であることを知りつつ、そのことに耐えてゐるのではないか。